

〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

みなさんは、3 M (三つのM) って聞いたことがありますか？

私が大学生の頃(数十年前のことになります)、この「3 M」という言葉が流行りました。

この3 Mというのは、「無気力 (Mukiryoku)」、「無感動 (Mukando)」、「無関心 (Mukanshin)」のことを指しました。

数十年前に、「今の若者は、3 M (無気力、無感動、無関心) におちいりやすい」と^{*}揶揄されていたことがあったのです。それは、無気力やうつといった、やる気が低い状態におちいった若者、あるいはおちいる可能性が高い若者が、たくさんいるように思われたからです。でも、これは、数十年経った今も、あまり変わっていないようにも思います。みなさんのまわりにも、やる気のない無気力な人(小学生や中学生、それからちろん高校生や大学生、そして大人)はいらっしゃるでしょうし、やる気のない様子を見たことがあるでしょう。

でも、やる気のない無気力な赤ちゃんを見たことがある人はいらっしゃるでしょうか？

① 飽きることもなく、さらに一歩を歩みだそうとします。小さな子どもは、走ったり、飛び跳ねたり、つかんだり、落したり、^① 飽きることもなくただ何かを「すること」に動機づけられています。赤ちゃんや小さな子どもたちは、無気力とはほど遠い状態にいます。

このことからいえることは、最初から無気力な人間なんていないということなのです。

それでは、人はどのようにして、無気力な状態におちいってしまうのでしょうか？

そこで、次の実験が行われました。実験参加者(人間)をある部屋に連れて行き、そこで大音響で騒音をならします。部屋は二つあって、複雑なボタンを正しい組み合わせで押すと音を止めることができる「逃避可能群」の部屋と、どんな組み合わせでボタンを押しても音が止まらない「逃避不可能群」の部屋です。その部屋で一定時間過ごしてもらった後に、二つ目の課題を行ってもらいました。

二つ目の課題では、どの部屋でも、複雑なボタンを正しい組み合わせで押すと、騒音を止めることができるというものでした。

二つ目の課題での行動を「逃避可能群」と「逃避不可能群」とで比較した結果、「逃避不可能群」では、三分の一の実験参加者が大きな音を止めるような行動に出なかったことがわかりました。

d、実験に参加したものの全員が無気力状態になるわけではありませんでした。逃避不可能群の三分の一ほどは、無気力状態にはならなかったそうです。

また、無気力状態になった人たちのなかでも、すぐに元の状態に戻った人もいれば、ずっと回復しない人もいたそうです。このように、無気力状態へのおちいりやすさ、それからの回復の違いには、個人差が見られることがわかったのです。

このような結果を踏まえて、それ以降の心理学では、「誰が A カンタンにあきらめ、誰が決してあきらめないのか？そしてそれはなぜだろう」ということに関心が移っていきました。

先ほど紹介した実験を行った、心理学者のセリグマンは、無気力状態に関する個人差を、人がもっている「説明スタイル」の違いで説明しました。説明スタイルについては、後で詳しく解説しますが、自分に起こった出来事をどのように説明する(捉える)傾向があるのか、という人の性質になります。

では、説明スタイルについて解説する前に、読者のみなさんが、どのような説明スタイルの持ち主であるのかを、確認してみよう。

友だちにあなたが傷つくようなことを言われた時、あなたはどうか考えるかを想像してみてください。

ここでは、次の二つの選択肢のなかから選んでください。

A 友だちはいつも人を傷つけることを平気でいう。

B 友だちは虫の居所が悪くて、たまたま私に当たったのだ。

選択肢 A のように、

1

人は、「永続的な」説明スタイルをとっていることになりました。

一方、選択肢 B のように、「たまたま」とか「時々」という言葉で考え、状況を限定し、悪い出来事は B イッカセイのものであると考える人は、「一時的な」説明スタイルをとっていることになりました。

このように、なにかの出来事の原因を説明しようとする際の態度を「説明スタイル」というのです。この質問では、説明スタイルのうち出来事の「永続性」について尋ねたものになります。

すぐにあきらめて無気力状態になりやすい人は、自分に起こった不幸は長く続くもので、いつまでも自分の人生に影響を与えるだろうと考えてしまいがちです。「説明スタイル」でいうと、永続的であるといえます。

逆に、無気力状態になりにくい人は、不幸の原因は一時的なもので、長くは続かないと信じています。このように考える人は、一時的な説明スタイルの持ち主になります。

ではもう一つ、「ある人に告白したがフラれてしまった」という出来事を想像してみましよう。あなたは次の二つの理由のうち、どちらのせいだと考えますか？

A 私には身体的な魅力がないので、フラれたのであろう。

B 私には魅力を感じるものが全くないので、フラれたのであろう。

この質問は、説明スタイルの「普遍性」の側面について、尋ねたものです。普遍性の側面は、「限定的」な理由によるものか、それとも「全般的」な理由によるものか、にわけられます。

選択肢Aのように、限定的な（特定の）説明をする人は、ある分野では無気力になるかもしれませんが、他の分野ではしっかりと歩み続けることができます。たとえば、自分には身体的な魅力はないかもしれないけれど、その他の面では良いところがある、と捉えているのです。身体的な魅力について落ち込むことはあっても、それ以外の分野で無気力になることはありません。

II

一方、選択肢Bのように、自分の失敗に普遍的な説明をしてしまう人は、私たちが不幸な出来事を経験しても無気力状態にならず、希望を持って生きていけるかどうかは、説明スタイルの二つの側面、つまり、永続性と普遍性にかかっているのです。

それでは、先ほど紹介した人間を対象にした学習性無力感の実験と説明スタイルがどのような関係にあるのかみていきましょう。

再度確認すると、「逃避不可能群」の実験参加者は、どんな組み合わせでボタンを押しても、騒音を止めることができませんでした。そして、こうした状況に置かれたときに、無気力状態になる人と無気力状態にならない人がいました。

その違いは、その人の説明スタイルの違いに基づいています。無気力状態にならなかった人は、どんな組み合わせでボタンを押しても騒音がなり響くという状況を、「この嫌な状況は、すぐに終わるだろう」と考えていた、つまり、**i** 的な説明スタイルをとっていたのです。

また、「複雑なボタンを正しい組み合わせで押す」といった、このような課題は「苦手なだけ」といったように、**ii** 的な説明スタイルをとっているのです。これは、この課題（のみ）が苦手なだけであって、他の課題は「苦手」としていいことを意味します。そのため、このような説明スタイルをとっている人は、別の課題を出された時には、無気力状態におちいることなく取り組むことができます。

一方、どんな組み合わせでボタンを押しても騒音がなり響くという嫌な状況に対して、無気力状態になった人は、「この嫌な状況は、いつまでも続くだろう」といったように、**iii** 的な説明スタイルをとっていました。そのため、二つ目の実験でもずっと続くと考えて、騒音を止めようとはしなかったのです。

あるいは、この人たちは「このような課題だけでなく、他の課題も自分にはできない。自分は何もできない」といったように、**iv** 的な説明スタイルをとり、無気力状態におちいるのです。

嫌な出来事を同じように経験したとしても、無気力状態になる人とそうならない人がいるのは、ある出来事をどのようにとらえる傾向にあるのかといった説明スタイルの違いによるのです。

さて、みなさんは、先ほどの二つの質問において、どのような説明スタイルをとっていましたか？

悪い出来事をどのように捉える傾向にあるのかといった説明スタイルは、みなさんがこれまで身につけた長年の習慣（くせ）によるものなので、すぐに変えるのは難しいかもしれません。でも、無気力になりにくい説明スタイルをとるような習慣を意図的につけることは、できるのではないのでしょうか。

そのためにまず大事なことは、自分がどのような説明スタイルをとっているのかに気づくことです。説明スタイルは、知らず知らずのうちに身につけてしまっているものなので、意識しないと、自分がどのような説明スタイルをとっているのか、

なかなか気づくことができません。

自分が常日頃、無気力になりやすい説明スタイルをとっていることに気づいたのならば、それとは違った理由を考える習慣をつけるように、心がけてみるとよいですね。

考え次第で人生のあらゆる出来事の捉え方は変わってきます。

たとえば、「テストが一週間後にある」という、おそろく多くの人にとって嫌な出来事に対して、みなさんはどのように考えますか？

「あくあ、テストか。勉強をしなくてはいけない。嫌だな……」と考えてしまった時点で、不安や憂うつな感情におそれ、胸がしめつけられるような身体的反応を経験するかもしれません。そうなる、嫌々ながらテスト勉強に取り組むことになりました。

しかし、「テストが一週間後にある」という同じ出来事に対して、「テストは知識を得るチャンスだ！」と考えてみたらどうでしょうか。何だか、やる気がわいてきませんか？

続いて、「^③大きな失敗をした」という時には、みなさんはどのように考えるでしょうか。

私たちの周りの景色は、考え次第で違って見えてきます。同じ一時間であっても、「もう一時間しかない」と考えるよりも「まだ一時間もある」と考えるほうが、その一時間の使い道は変わってくるでしょう。ただし、人によっては、「もう一時間しかない」と考えたほうが、やる気が出るかもしれません。

あなたが抱えるやる気の問題も、出来事や事象をどう捉えているのか、といった考え方に起因しているのかもしれない。

無気力になりやすい説明スタイルを身につければ、人生によくある挫折に対してもっと肯定的に対処できるようになりますし、大きな失敗からも以前よりはずっと早く立ち直れるようになります。勉強でもスポーツでも仕事（バイト）でも、もっと良い成績を上げられるようになり、長い目で見れば健康状態も良くなるのです。

やる気がわいてくるのも、無気力状態におちいってしまうのも、それはあなたの考え次第なのかもしれません。

（外山美樹『勉強する気はなぜ起こらないのか』より）

* 揶揄：…からかうこと。

(一) 線部A「カンタン」、B「イツカセイ」を、それぞれ漢字に改めなさい。

(二)

a

d

 に入れる言葉として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはいけません。

ア おそらく イ そのうえ ウ もしかすると エ したがって オ しかし カ なぜなら キ つまり

(三) 線部①「飽きる」こととなくただ何かを「することに動機づけられています」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思い通りに体を動かす楽しさがわかってきて、疲れも忘れて運動をし続けるということ。

イ 目的があつて何かをするのではなく、ひたすら体を動かすことが心地よくできているということ。

ウ 失敗するのははじめだと考えず、様々なことに前向きに挑戦して可能性を広げているということ。

エ 努力すれば必ず成功することを学ぶために、できるだけ同じことをただくりかえすということ。

(四) 線部②「説明スタイル」とありますが、それはどのようなものですか。本文中から二十五字以内の表現を探し、最初と最後の三字をぬき出さない。ただし、句読点も字数にふくめます。以下の問題も同様です。

(五)

I

、

II

 に入れる表現として最も適当なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

「ア 起こってしまった悪い出来事を、「いつも」とか「決して」という言葉で考え、いつまでも続くと思っている

I
イ 偶然起きた出来事にすぎないのに、「傷つける」とか「嫌っている」という言葉で考え、悪く解釈してしまおう
ウ どうなるかわからない出来事を、「いつも」とか「きつ」という言葉で考え、先回りして悪く予想してしまおう
エ すでに解決した出来事なのに、「傷つける」とか「やり返す」という言葉で考え、いつまでもケンカ腰でいる

II
ア すべての分野であきらめの気持ちを持てば楽になると知っていて、無気力を装っているのです
イ ある一つの分野で抱いた不安が拡大していつて、気がつけば無気力からぬけ出せなくなっているのです
ウ すべての分野で自信をなくしてわずかな希望があることにも気づかず、無気力が日常化してしまいます
エ ある一つの分野で挫折するとすべてをあきらめてしまい、無気力が一般化してしまいます

(六) i iv に入れる言葉として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはいけません。

ア 永続 イ 普遍 ウ 一時 エ 限定

(七) ——— 線部③「大きな失敗をした」とありますが、その後でやる気が出てくるようにする考え方は、どのようなものだと考えられますか。それを説明した次の文の を、筆者の考えをふまえて二十字以内で補いなさい。

 という考え方。

〔問題二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

朝練で荒れたコートをも、昼休み中にブラシでならすのは一年生の役目だ。ただし、二十四人全員でする必要はないので、グーパーじゃんけんの一発勝負で人数の少ないがわになった者たちが四面あるコートの整備に当たる。同数の場合は、前日に負けた手をだしたがわが負けになる。

「一中の男子テニス部に代々うけつがれてきた伝統だからな。誰かがひとりでやることになったとしても、手伝ったりするなよ」

四月半ばに二年生の中田さんから言われたときに、グーパーじゃんけんだと結果がかたよって不公平になるのではと、ぼくは心配になった。

「まあ、やってみな。おもしろいもんで、あんがい公平にいくから。いろんなメンバーでコート整備をするようになって、自然にチームワークもよくなるしな。毎日自分がやるものだとおもって、助かったらラッキーくらいに考えておくのが無難だけど、本気で読みを入れて勝負するのもおもしろいぜ。ただし、かげで相談をして、誰かひとりをハメるのは絶対になしだぞ。わかったな」

いまはキャプテンになっている中田さんは、いかつい顔に似合わず ① 気がきくひとらしく、こちらの懸念をあらかじめうち消してくれたのはありがたかった。さらに、いくら伝統だといっても、じゃんけんのせいで人間関係が悪くなつては意味がない。そのときは当番制に切りかえてやるから、遠慮なく言いこいとフォローまでしてくれたが、ぼくは翌日から昼休みのじゃんけんが気になってしかたがなかった。

もっとも、中田さんが言ったとおり、たいていは十四人对十人くらいの結果におちついて、自分が少ないほうにはいつたときでも余裕をもってコート整備をすることができた。一度だけ、グーが二人になったことがあり、ぼくもそのうちのひとりだった。勝負の結果を嘆いているひまなどなく、二人ともが左右の手に一本ずつブラシを持ち、無言でコートを掃いてまわった。どうにかやりおえたときに昼休みの終了を告げるチャイムが鳴りだして、大急ぎでブラシをかたづけて教室にかけこんだあとはしばらく汗がひかなかった。

ひとりになったら、絶対に時間内にはおわらない。そのときそうおもったが、さいわい十月半ばの今日まで、二十二

人对二人というのが最大のかたよりだった。でも、そろそろ、グーかパーがひとりだけということになるかもしれない。「おい、末永。早く来いよ」

ぼくがみんなの輪にはいりかけたときに武藤がどなって、ふりかえると末永が昇降口から出てきたところだった。長髪を、トレードマークのヘアバンドでまとめた末永が、長い手足をふって一気に迫ってくる。

「太二、パーな」

武藤は小声で言うと、「そっぽをむいた。」 いままで一度もなかったことだが、みんながなにをしようとしているのはわかった。やめたほうがいいよ、ということばが口から出かかったときに末永が到着した。

「悪い悪い。給食のあと、腹が痛くなってさ」とおくれた言いわけをする末永を尻目に、「グーパー、じゃん」とみんなが声をだした。

「あっ」

自分だけがグーだとわかり、末永がしゃがみこんだ。うなだれた顔にかかった髪のスきまから、「とがらせた口が見えた。」

「すげえ偶然だな。おい、末永。手伝ってやりたいのは山々だけど、よけいなことをしたら先輩たちに怒られるからよ」

武藤は ② 早口で言うと、さあ行こうぜというように右腕をふった。ぼくは残って末永と一緒にブラシをかけようかとおもったが、久保に肩をたたかれて、みんなにまぎって小走りで A コウシヤにもどった。

たまたま末永がおくれたのかこつけて、武藤がワナをしかけたのだ。もしも末永と同時に到着していたら、ぼくもグーをだしていたかもしれない。ぎりぎりセーフと 安堵するのと同時に、 末永がキャプテンの中田さんか顧問の浅井先生にこのことを訴えたいへんだと不安がよぎった。

中田さんはふだんはおだやかだが、一度怒るとカンタンには相手を許さなかった。夏休みの練習で、数人の二年生が日かげでサボっていたときには、自分も一緒にやるからと二年生全員で二百回素振りをした。あらかじめ注意されていたのに、末永ひとりをハメたことがばれたら、どんな罰を与えられるかわからない。

③ こんなことなら武藤の言いなりになるんじゃないやな かつた、ぼくは後悔していた。でも、聞こえなかったふりをして

グーをだしていたとしても、自分だけいい子になりやがってと、みんなの B ハンカン を買っていたらう。

久保が武藤についていたのも、ぼくにはショックだった。久保は小学一年生からの友だちで、超がつくほどまじめなやつだ。そのぶんかけひきがへたで、肝心なところで相手に a をかかれる。グーパーじゃんけんでもよく負けて、三回に二回はコート整備をしていた。だから、というわけでもないが、ぼくは久保ならこういうときは絶対にとめるだろうとおもっていた。

武藤と末永はブレーススタイルがよく似ていた。二人とも百七十五センチをこえる長身で、威力のあるサーブ&ボレーを C ブキ にしている。ツボにはまると手がつけられないが、ベースラインでの打ちあいをやや苦手にしていて、自分のイージーミスから崩れることが多いところまでそっくりだった。

ただし、武藤が練習熱心なのに対して、末永はすぐに手をぬこうとする。筋トレのときに、末永がまじめにやらなかったせいで、スクワットや腕立て伏せの回数を増やされたことも一度や二度ではなかった。だから、武藤が中心になってハメたのはたしかに行きすぎだが、末永にまったく b がないわけではなかった。

そうはいっても、ひとりで四面のコートにブラシをかけるのはたいへんだ。末永の性格からすると、途中で投げださないともかぎらない。それをきっかけに末永が退部したら、後味の悪いことになってしまう。

昼休みのおわり近くに、四階の教室の窓からグラウンドに目をやると、末永はまだブラシをかけていた。かなりがんばったようで、残りは半面だったが、そこで昼休みの終了をしらせるチャイムが鳴りだした。両手にブラシを持った末永は前かがみになって最後の力をふりしぼり、コートの手端にたどり着くなり地面にひぎをついた。

末永は放課後の練習にいつもどおり参加したので、ぼくは胸をなでおろした。今回は大ごとにならずにすんだが、昼休みのグーパーじゃんけんがあるかぎり、④ こうした問題はくりかえされるのだとおもうと気が重かった。 なにより、武藤の言いなりになってしまった自分が情けなかった。練習にも集中できず、ぼくはどうすればいいのかを考えながら家までの帰り道を歩いた。

*懸念：…気にかかること。不安。心配。

(一) 線部A「コウシヤ」、B「ハンカン」、C「ブキ」を、それぞれ漢字に改めなさい。

(二) a、 b に漢字一字を入れ、a「油断していたところにつけこまれる」、b「まったく欠点がない」という意味の言葉を完成させなさい。

(三) 線部I「そっぽをむいた」、II「とがらせた口」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

I「そっぽをむいた」

ア 相手に顔向けできないことを示す態度をとった。 イ 自分には無関係だということを示す態度をとった。
ウ 相手の言葉を聞きこうとしない態度をとった。 エ 腹を立ててふてくされるような態度をとった。

II「とがらせた口」

ア 納得のいかない結果に不満を持っている様子。 イ 相手に反論しようと思気込む様子。
ウ 泣きそうなのを必死にこらえようとする様子。 エ 言いたいことを我慢している様子。

(四) 線部III「安堵する」とほぼ同じ意味の言葉を本文中から八字でぬき出しなさい。

(五) 線部①「気がきくひと」とはどういう人ですか。本文の内容をふまえて四十字以内で説明しなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。以下の問題も同様です。

(六) 線部②「早口で言う」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちがしたことなのに、「面倒なことになりそうなのを必死に回避しようとしている」。
イ 自分たちの仕組んだことが末永に伝わらないように、この場から急いではなれようとしている。

ウ 長く話せば余計なことを言ってしまうそうなので、早めに話を切り上げようとしている。

エ 誰かに口出しをされないように、話しかけるすきを与えないようにしている。

(七) 線部③「こんなことなら武藤の言いなりになるんじゃないやなかった」とありますが、ここでの太二の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 武藤に言われるがままに行動してしまい、日頃から支配的な武藤に対していらだちを感じている。

イ 不安を感じたり後味の悪さが残ったりするなら、はじめから加担しなければよかったと思っている。

ウ みんなが計画する悪事を止められなかった自分を責め、人に逆らえない自分の弱さを痛感している。

エ 面倒な思いをするくらいなら、自分も末永と同じ立場になったほうがよかったと思っている。

(八) 線部④「こうした問題」とはどのような問題ですか。それを説明した次の文の に当てはまる十四字の表現を本文中からぬき出しなさい。

誰かひとりを陥れることによつて、 という問題。

[問題三] 次の文章は前問の本文の続きです。これを読んで後の問いに答えなさい。

「神様、雨を降らせて、明日の朝練を中止にしてください」

寝るまえに三度も祈ったのに、いつもと同じ午前六時に目覚まし時計におこされて雨戸を開けると、空はよく晴れていた。一階では母が朝ごはんのしたくをしていて、父は母が帰ってくるまえに仕事に行ったという。

「学校でなにかあったの？ おとうさんがメールをくれて、太二のことを心配していたから、おかあさん早引けしてきたのよ」

夜勤のときは午前八時で交替だったとおもいだし、ぼくは母にあやまった。

「心配させてごめん。でも、なんでもないんだ。おかあさんは、きょうは休み？」

「夜勤あけだから、あさっての朝まで家にいるわよ」

「そうなんだ」と答えながら、今夜は父と母がそろっているのだとおもうと、やるだけのことはやってやろうと気合いがはいった。母がつくってくれたベーコンエッグとトーストの朝ごはんを食べて、ぼくはラケットを背負い、かけ足で学校にむかった。

朝練では、一年生対二年生の対抗戦をする。シングルマッチで一ゲームを取ったほうの勝ち。四面のコートに分かれて、合計二十四試合をして、白星の多い学年はそのままコートで練習をつづける。負けた学年は球拾いと声だしにまわる。

カ試しにはもってこいだが、二年生との実力差は大きくて、これまで一年生が勝ち越したことはなかった。武藤や末永でも三回に一回勝てるかどうかで、久保は一度も勝ったことがない。ぼくは勝率五割をキープしていたが、団体戦に出場するレギュラークラスには歯が立たなかった。ただし、一度だけ中田さんから金星をあげたことがある。ベースラインでの打ちあいに持ちこんで、ねばりにねばって長いラリーをものにした。誰が相手であれ、きのうからのモヤモヤを吹き払うためにも、ぼくはどうしても勝ちたかった。

ところが、やる気とは裏腹に、ぼくは一ポイントも取れずに負けてしまった。武藤や末永もサーブがまるで決まらず、ダブルフォールトを連発して自滅。久保も、ほかの一年生たちも、手も足も出ないまま二年生にうち負かされて、これまでにない早さで勝負がついた。

「どうした一年。だらしがねえぞ」

キャプテンの中田さんに命じられて、ぼくたちはグラウンドを走らされた。いつも先頭をきっているので、みんなの姿を見ずに走るのはなれていたが、今日だけは武藤や末永や久保がどんな顔でついてきているのか、気になってしかたがなかった。

誰もが、きのう末永をハメたことを後悔しているのだ。足を止めて、一年生全員で話しあいをして、昼休みのコート

整備を当番制にかえてもらおうようにキャプテンに頼もうと言いたかったが、おもいきれないまま、ぼくはグラウンドを走りつづけた。

「よし、ラスト一周。ダッシュでまわってこい」

中田さんの声を合図に全力疾走となり、ぼくは最後まで先頭を守った。

「ボールはかたづけしておいたからな。昼休みのコート整備はちゃんとやれよ」

八時二十分をすぎているので、ネットのおむこうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、^⑤ まちがっても今日はやるなよと釘を刺しておきたかったが、息が切れて、とても口をきくところではなかった。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、ぼくは武藤と話さなくてよかったとおもった。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかったにちがいない。武藤ではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が広がっていたはずだ。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがないのも事実だった。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。もしかすると、きのうのしかえしに、末永がなにかかけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしでもうしあわせて、たとえ負けてもひとりにはならないように安全策をこうじているのかもしれない。

ウラでうちあわせ可能な手口がつきつぎ頭にうかび、これはおもっている以上に厄介だと、ぼくは頭を悩ませた。

やはりキャプテンの中田さんに助けをもらうしかない。そうおもったが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きついおもいをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいつているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

⑥ そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭にはいっていなかったが、ぼくはようやく自分のすべきことがわかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下に出ると、武藤が顔をう

つむかせてこっちに歩いてくる。

「よお」

「おっ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔えがほをうかべた。そんな姿は見たことがなかったので、もしかすると自分から顧問の浅井先生かキャプテンの中田さんにうちあげたのではないかと、ぼくはおもった。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートに来るはずだ。たっぷり怒おこられるだろうが、それでケリがつくならかまわなかった。

給食の時間⑦がおり、ぼくはテニスコートにおかった。しかし集まったのは一年生だけだった。ぼくは落胆らくたんすると同時に、自分の甘さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張きんちようで青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた。いまさらながら、ぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況じじょうきょうで、きのうはハメて悪かったと末永にあやまったら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よけいなことを言いやがってどうらまれて、末永だって怒いかりのやり場にこまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふうにグーパーじゃんけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、偶然ぐうぜん、グーパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて收拾しゅうじゆうがつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿がうかんだ。一緒にテニススクールに通っていたころ、父は試合で会心のショットを決めると、応援おうえんしているぼくたちにむかってポーズをとった。ぼくや母も、同じポーズで父にこたえた。

「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろしたぼくはチョキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではど

うしたってチョキにしか見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があつた。

「太二、わかったよ。おれもチョキにするわ」

久保はそう言ってグーからチョキにかえると、とがらせた口から息を吐はいた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるを隠かくすように口をおすび、すばやくうなずいた。そして、武藤は握にぎっていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくにむかってその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョキにかえて、輪のなかにさしだした。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もなし、今日はチョキがブラシをかけるよ」

そう言って、ぼくが道具小屋にはいると、何人かの足音がつづいた。ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人がついてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかつた。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離はなれないように歩幅ほはばをあわせて歩いていると、きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は大股おおもたでブラシを引いていく。コートの端はしまでくると、内側の武藤が歩幅を狭せまくしてきれいな弧こを描えがき、直線にもどれば二人ともがまた大股おおもたになってブラシを引いていく。

ぼくたちはこれまでよりも強くなるだろう。チーム全体としても、もっともって強くなれるはずだ。

ぼくはいつか、テニス部のみんなに、父がつくった豆腐とうふを食べさせてやりたいとおもった。さらに、このコートで家族四人でテニスをしたいとおもい、押し入れにしまつてある四本のラケットのことを考えた。ぼくはブラシを引きながら、胸のなかで父と母と姉にむかってVサインを送った。

(九) ——線部⑥「まちがっても今日はやるなよと釘を刺しておきたかった」と太二が考える理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生や先輩から怒られたくないので、昨日のようなことは二度としないしてほしいと思っているから。
イ 悪だくみの結果に味をしめ、昨日のように自分だけ楽をしようとする武藤に忠告をしたかったから。
ウ 昨日のことを後悔しているのと同じことをすると、次は武藤が標的にされてしまうから。
エ 今日と同じことをくり返すと、今度こそ取り返しのない事態に発展すると考えたから。

(十) ——線部⑥「自分のすべきことがわかった気がした」とありますが、「するべきこと」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちのことよりも、一番苦しんでいる末永の気持ちを考えて、まず謝罪すること。
イ じゃんけんを嫌がる末永の気持ちに配慮して、当番の決め方を変えようとする事。
ウ 一年生部員全員の不安を解消するために、キャプテンの力を借りようとする事。
エ この事態を一度きりのこととして収めるために、全員に反省をうながすこと。

(十一) ——線部⑦「自分の甘さ」とはどういうことですか。それを説明した次の文の [] を三十字以内で補いなさい。

自分たちのしたことを武藤が打ち明けたことにより、 [] と期待したこと。